

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業 終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	ラオスで日本の IT パスポート試験をビジネス常識や IT リテラシーの測定に活用してビジネス人材のスキル底上げにつなげる取り組み
(2) 実施団体名	一般社団法人新興事業創出機構 (JEBDA)
(3) 実施期間	2024 年 11 月 5 日から 2025 年 11 月 4 日
(4) 実施国	ラオス人民民主共和国
(5) 活動地域	ビエンチャン（首都）
<p>(6) 活動概要</p> <p>①活動の背景：</p> <p>本取り組みはラオス技術通信省（当時は郵便通信省）の IT 能力開発、人材育成機関である ICT 機構 (Institute of Information and Communication Technology (以下、IICT)) から、ラオスで利用できるよう IT スキルレベルの測定のよい手法が日本に無いでしょうか、との相談を受けたのがきっかけです。ラオスでは検定試験のような仕組みがいまだ未整備かつ不十分で、特に IT 領域のスキルレベルを客観的に測ることが容易でないことが課題となっているとのことでした。</p> <p>わが国の IT のスキルレベル測定手法としては、代表的なものとして独立行政法人情報処理推進機構（以下、IPA）¹ 殿の情報処理技術者試験が挙げられます。</p> <p>IPA のホームページを確認したところ、IPA とアジア 6 か国（フィリピン、タイ、ベトナム、ミャンマー、モンゴル、バングラデシュ）の政府機関が協力して ITPEC² アジア共通統一試験という枠組みがあることがわかりました。2020 年 2 月に IPA の国家資格・試験部国際グループを訪ね、ラオス側の現状の共有と相談を行いました。そこでは、各種試験の過去問と解答は公開されているため、これをラオスで独自に利用して試験を行う（無償で利用する）ことは可能であり、まずはそこから着手してみてくださいという助言をいただきました。</p> <p>ラオスの現状を踏まえ IICT 側と協議し、ラオスにおいて測られるべきスキルレベルは、システム開発に従事する高度 IT エンジニアの技術スキルというよりも、産業人材の基本スキルとしての IT の理解、多くの仕事デジタル化に向かう中でのデジタルリテラシーと呼ばれるスキルの底上げであり、そのためのスキル測定手段として、IPA の一連の試験のうちのひとつ、「IT パスポート試験（以下、i パス試験）³」を適用するのがよいのではないかということになりました。</p> <p>i パス試験は、テクニカル問題に加え IT 活用に必要なビジネス常識を問う問題も含むスキル評価テスト</p>	

¹ IPA: <https://www.ipa.go.jp/>

² ITPEC: <https://itpec.org/jp/index.html>

³ i パス: <https://www3.jitec.ipa.go.jp/JitesCbt/html/about/about.html>

で、IT 技術者の技術レベルというより、IT を使って仕事をするホワイトカラー人材（今日では、日本に限らず新興国、無論ラオスでも IT を使って仕事をこなすことが求められる層）が最低限身につけているべき知識やその使い方の習得レベルを評価するものとなっており、仕事をしていく上でITを道具として上手に利用していくために身につけていることとそうでないことがわかる計測手段として大変有効であると考えられます。

ラオス政府は2021年にICTマスタープランを作成し経済成長のためのデジタル化を推進する考えを表明しました⁴。その中で、ラオス企業（特に中小企業：デジタルMSMEと呼んでいるようです）が業務プロセスをデジタル化することで経済成長を促進し、そのための民間企業のデジタル人材育成の重要性を挙げています。

日本側ではコロナ禍が落ち着いた2023年12月に、あらためてIPA国際グループを訪問し、ラオスにおける人材育成取組（そのデジタル活用スキル測定手法としてのiパス試験利用）について相談し、JICA基金の活用を通じた取組の方向性について、理解を得ました。

私たち一般社団法人新興事業創出機構（以下、JEBDA）は、東日本大震災の復興支援として被災地域の企業の経営者サポート、商品開発や販路開拓などの企画推進、社長の右腕や各種企画を実行する人材の育成などを手掛けながら、東北以外の地域も含めた地方創生に貢献する活動を行ってきました。当団体は実は、代表理事が2010年に実施したラオスの教育支援に関するスタディツアーの取組が母体になっています。ラオスでの活動を開始する前に発生した東日本大震災を受けてリソースを東北に振り向けたことで国内中心の活動となっていました。コロナ禍後の事業方針の中で途上国の開発協力にも力を入れるため、本件事業を手掛けることといたしました。

補足：iパス（ITパスポート試験）について

ビジネスに必要な基礎知識を網羅的に身につけているかどうかを確認する資格検定で、ビジネス全般、ITの基本、情報セキュリティ、コンプライアンスなどといった幅広い知識を問う全ての社会人（ITを利用して仕事をする人）を対象とした内容で、社員全員に受験させる企業もある試験。

全100問のうち、ストラテジ系：マネジメント系：テクノロジー系からそれぞれ35問程度：20問程度：45問程度の配分で出題される。経営におけるヒト、モノ、カネ、情報に対する考え方や管理・手法の意義と必要性、ITの進展とそれに伴う社会の変化、企業活動及び社会生活におけるIT利活用の動向、図表、グラフによるデータ可視化の方法、売上と利益の関係（利益、粗利益、営業利益、損益分岐点、原価、変動費、固定費などの考え方）、SWOT分析や市場調査などマーケティング、ネット広告やデジタル決済、知的財産、コンプライアンス、データ分析、サイバーセキュリティ、DX、AIやIoTなど幅広い分野から出題される。

⁴ 参考（ICTマスタープランについて（ラオス国会））：

<https://na.gov.la/%E0%BA%84%E0%BA%B0%E0%BA%99%E0%BA%B0%E0%BA%9B%E0%BA%B0%E0%BA%88%E0%BA%B3%E0%BA%AA%E0%BA%B0%E0%BA%9E%E0%BA%B2%E0%BB%81%E0%BA%AB%E0%BB%88%E0%BA%87%E0%BA%8A%E0%BA%B2%E0%BA%94%E0%BA%AA%E0%BA%B0%E0%BB%80/>

i パスの対象レベルチャート⁵(全ての社会人xIT を利活用する者)



(図は IPA 資料より引用加工)

②活動の目標：

上位目標としては、ラオスの人材のビジネススキル(企業運営や外国企業とも取引できるレベルのビジネス知識と業務でITを上手に使える能力)が底上げされ、国内外で活躍できるようにすることを目指します。今回の活動においては、iパス試験がラオスのデジタル人材、デジタル活用のスキル測定手法として妥当かどうかを確認し、妥当であれば、以後ラオスのデジタル化戦略に沿って人材を育成していくにあたってのスキルスタンダードのひとつとして機能させられるようにするロードマップ(今後どのような取組みにつなげていくのがよいか)の方向性を識別する。ICTとJEBDAの協力関係を構築し、デジタル人材育成とそのスキル測定の仕組みをつくっていく一歩としたいと考えました。

⁵ 図は IPA のホームページより引用、加筆

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

概要

ラオスにおける i パス試験の適用可能性を検証するため、過去問をラオス語に翻訳し、パイロットを実施しました。採点結果は日本の合格基準に準ずるかたちで評価し、今後ラオスでの利活用の方向性について検討いたしました。

① 実施計画の策定と試験準備作業

本来の i パス試験は、120 分 100 問ですが、IICT と協議した結果、多くのラオス人があまり長時間の試験に慣れていない可能性があることから、半分の 60 分 50 問とすることになりました。

Format: Group examination using the online system (provided by IICT).

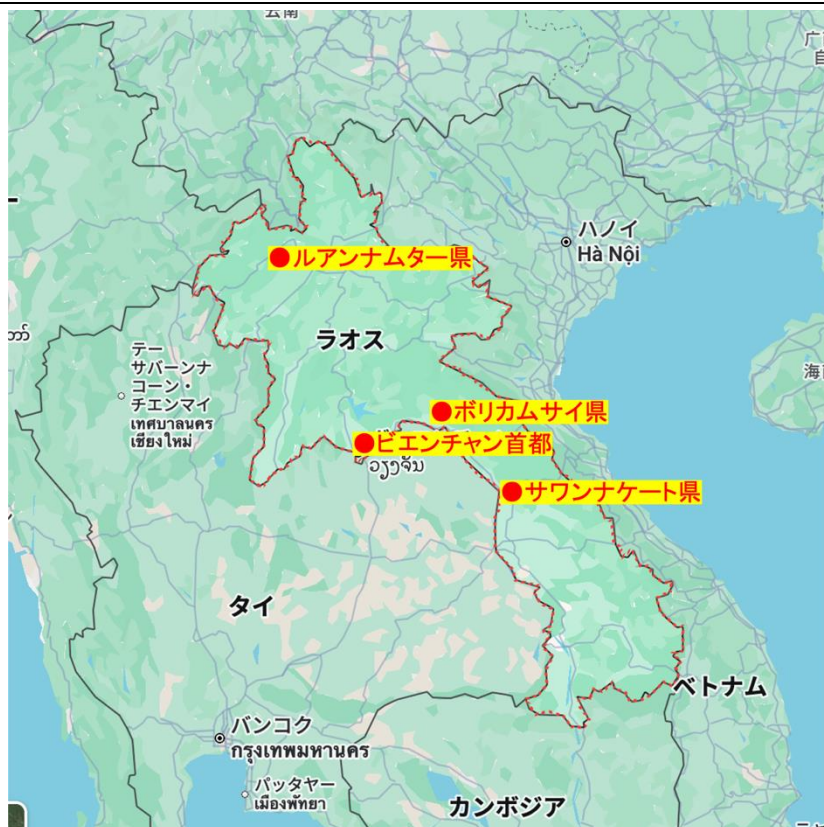
Questions: 50 questions randomly selected from the translated pool.

Supervision: Monitored by designated exam proctors.

Time	60 minutes (120min in Japan)
Num of Questions	50 (100 in Japan)
Question Type	Multiple-Choice (1 from 4)
Structure of Questions	Strategy: 35% Management: 25% Technology: 40%
Pass Mark	Total points (of all fields): 60% (Points in each field: 30%)

*Questions are translated in Pasa Lao

最近の過去問から日本の法令に関わるものなどを除きラオスでも必要とされと考えられる問題をピックアップして、ラオス語に翻訳。このとき、ラオスで委託した翻訳作業について専門用語や略語などについてラオス人が理解できるものであることを確認し、必要に応じて何度も差し戻しながら進めました。i パス試験はストラテジ、マネジメント、テクノロジーの 3 分野について、それぞれ 35:25:40 の比率で出題されることから、それを満たすように問題を識別して翻訳するようにしました。日本で施されている i パスは、1000 点満点中 600 点以上かつ、3 分野のそれぞれで 30% 以上正解した場合を合格として合格証が発行される認定試験となっているので、同様の基準で合否を判定することとしました。



(地図は Google Map より引用加工)

なお、当初は紙ベースでの試験を想定していましたが、IICT 側からオンラインで試験を実施可能なシステム利用の提案があり、原則集合形式で試験監督を置いた状態でのオンライン試験方式としました。

対象者は、IICT の意向を踏まえ、主にIICTでICTトレーニングを受けている公務員や研修生、ラオス国立大学の学生らを中心とし、またラオス日本センター（LJI: Lao-Japan Institute）殿の協力を得てビジネススクールで学ぶ経営者などの社会人、ラオスのIT企業の従業員などとなりました。これらの受験者はビエンチャン首都在住の勤者です。

さらに、ボリカムサイ県のラオス青年同盟に派遣されている JICA 海外協力隊隊員に青年同盟 IT センターをご紹介いただきましたが、そこでiパス試験に大変関心を持たれ、「ぜひ青年同盟でも試してみたい」とのことで、ボリカムサイ県のほか、サワンナケート県、ルアンナムター県での実施も実現しました。

実施スケジュール

- 2024 年 11 月：具体的な計画の策定（着手）
- 2024 年 12 月：プロジェクト説明資料作成および IICT 等関係機関への説明および意見交換
- 2025 年 1 月から 2025 年 6 月：問題（iパス試験過去問）のラオス語化翻訳および試験実施事前準備
- 2025 年 6 月から 2025 年 9 月：試験の実施・採点評価・結果分析
- 2025 年 7 月：中間報告会、青年同盟との連携協議
- 2025 年 10 月：結果とりまとめ、ラオス政府（IICT）への報告、JICA 殿への報告

実施結果について:

	Examinee	Passed	Pass Rate(%)
Total	396	190	49
IICT	78	45	58
NUOL	266	126	47
Others	52	19	37

Others: Lao Japan Institute, Lao Youth Union, Private ICT Company

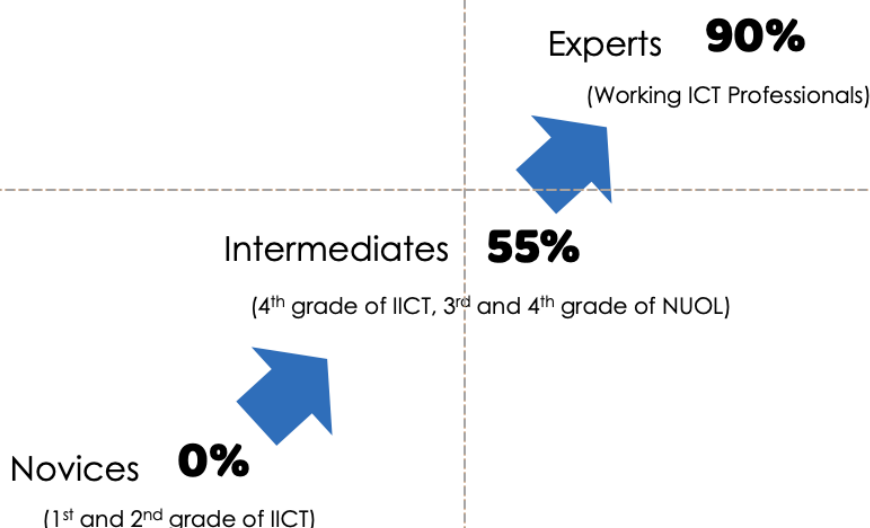
計画段階では 150－200 名程度の受験者を獲得することを目標としましたが、ラオス国立大学や青年同盟の積極的なご協力もあって、合計 396 名に受験してもらうことができました。

前述の合格基準を適用した場合、190 名が合格となり全体の合格率は 49%でした。

日本国内で実施されている i パス試験の合格率が 50%程度であることと対比して、今回のラオスにおける試行の結果としては、一定のスキル測定ができるものであったと考えられます。

むしろ、日本と同等レベルの合格率だったというのは意外な好成績でした。この点については、ラオス国立大学工学部で情報工学を専攻している学生や IICT でトレーニングを受けた受験者が多く含まれていた影響があるとみられますが、そうした機関の教育がデジタル人材の育成に貢献していると推察される結果であったとも言えるかと思います。

IP exam results are related to ICT proficiency.



IT 教育に対する習熟度でおおまかに比較すると、これから勉強しようとする層 (Novices) では合格者が無く、教育機関で一定以上学習した層 (Intermediates) で 55%、職業的に IT を使っている層 (Working ICT Professionals) で 90%が合格するというように、習熟度と合格率に相関が見られることから、スキル測定手法として利用可能だろうという結果が得られました。

(2) 実施成果：

今回の取組みでは、まずはラオスにおいてiパス試験のような検定試験が機能するものとして適用できるのかどうか最初のポイントでしたが、実施運営面においても、試験結果面そのものにおいても、スキル測定手法として十分に有効であろうと考えられることがわかりました。

また、その有効性がラオス政府側(IICT)にも理解され、iパス試験を活用してラオスのデジタル化戦略におけるデジタル人材の評価指標のひとつとして検討される素地ができたと思います。

実際、ラオスでの報告および意見交換の場では、IICT側から、ラオスでiパス試験を活用していくことができれば心強いという期待のご意見をいただくことができました。

そして、スキル測定の検定試験としてというだけでなく、合格水準に達するためにどのようなことを学んでいくべきか、つまり、どのようなカリキュラム、教育コンテンツを用意すればよいかなどについても今後検討していくことになりました。

また、IICT側からは、今回有効性の確認が出来たので、今後はより幅広い属性や地域の人たちに対象を広げ、ICTマスタープランで掲げる労働人口の3%以上をデジタル人材とする目標のための教育や測定の仕組みづくりにつなげていきたいというお話があり、JEBDAとしても協力していきたいと考えている旨をお伝えしてきました。

一方で、今回の受験者は首都の高等教育機関でITに関するトレーニングを受け将来専門人材となる層が半数程度を占めていることから、一定以上の平均得点、合格率を示しています。ラオスのスキルスタンダードにiパス試験を活用するためには、地域の拡大、受験者のバックグラウンドの拡大などを通じて平準化したサンプルを得て、実践的な利用方針を検討する必要があるだろうと考えられます。この点については、IICTからも今後行いたい活動として意見が出ており、引き続き協力できればと思っております。また、試験を100問120分とすることも考えたいところです。

iパス試験では、IT技術そのものに関する問いのほかに、ストラテジやマネジメントといったテクノロジーを活用するための前提となるビジネスや社会の知識、安全に技術を使いこなし、情報を守り、システムを運用するために必要なことについて問うています。合格者でも技術知識は高いものの、ストラテジやマネジメントの得点は相対的に低く出る傾向も見られることから、そうした内容を教育プログラムの中で位置付けを上げていくことも求められるのではないかと考えられます。

全体としては、最初のきっかけとなったIICTからの「日本にラオスで利用できるITスキルレベルの測定のよい手法はないか」という問いかけに対し、「日本のiパス試験」というひとつの的確な答えを返すことができたと思います。

(3) 得られた教訓など：

今回の事業では、スキル測定の手法を見出すという当初のねらいにフォーカスしましたが、そのためにどちらかというと測りたい側(この場合はラオス政府、IICT)からの視点での計画実行となり、測られる側のインセンティブへの配慮にもっと工夫の余地があったかもしれません。ラオス国立大学、IICT、青年同盟などトップダウンに近いかたちで実施できた場合は比較的スムーズに手配できましたが、民間企業の従業員やラオス日本センタ(LJI)のビジネススクールで学ぶ経営者など、自発的に受験してもらうケースで、本人にとってのメリットがうまく伝えられなかったこと(思ったより受験者数が伸びなかった)が反省点として挙げられます。

今後、ラオスにおいてiパス試験を活用していくためには、シラバスに沿った有用な知識を身につけることへの動機づけ、試験に合格した場合のメリットに配慮した仕組みづくりが大切になってくると考えられます。

ラオスにおいて、学ぶ、知識をつける、スキルを向上させることが、条件の良い就職につながる、高い給与

が得られる、職業的な貢献によって自己実現ができる、というようなプラスのサイクルをつくっていくことが求められるはずです。私たち JEBDA は、新しい事業を見つけ、そのための事業環境を整備し、必要な人材育成、コラボレーション、コミュニケーションを促進していくことをめざし、団体名に「新興事業創出」を謳っていますが、ラオスの産業が発展するために今回のような活動を続けていきたいと思っています。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

IICT 側よりシラバスに沿った教育プログラムの策定方法についてご質問を頂いたことを受け、IPA 国際グループ殿に英語版テキストの利用について相談しています。現状 ITPEC 加盟国に限って提供しているものだが、ラオス政府がカウンターパートで JICA 殿の支援を受けた取組みの一環であることも考慮して電子ファイルで利用可能とすることができないかなどご検討頂いているところです。現状では、サンプルとして紙ベースのテキストを一冊ご提供いただいたので、これをもとにラオス側とも内容を確認する予定です。

今後、IICT や青年同盟が広域かつ広い層に対しても i パス試験を用いたスキル測定を行って、将来の本格的な活用につなげていくために、ここで活動が途切れてしまわないようコミュニケーションを継続してそれぞれの組織が主体的に取り組んでもらえるようにしたいとの考えです。

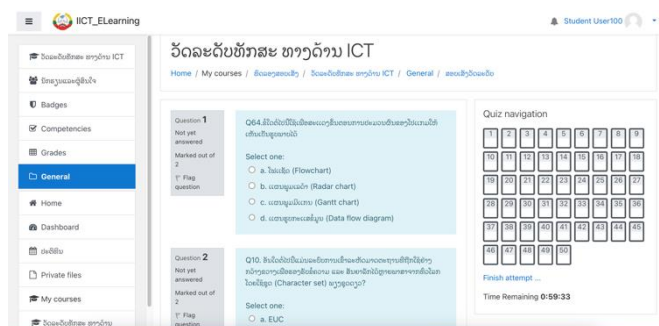
引き続き、日本の優れたコンテンツ(i パス試験等)を活用して、ラオスとしてのデジタルスキルスタンダードを明らかにし、持続可能なカタチで、人々のスキルを測りたい側と測られる側の人々の双方がメリットを得られる仕組みの構築につなげたいと考えています。小さな一步一步の積み重ねになると思いますが、ラオスのデジタル化に少しでも貢献できるべく機会をみつけて関わっていきたいと思います。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

活動中に JICA ラオス事務所を通じてボリカムサイ県の青年同盟で IT 教育を行っている海外協力隊の隊員の方にご紹介いただいたことをきっかけに、ビエンチャン首都の本部で全国の青年同盟のメンバーに対する IT 教育を担っている IT センターとつながり、そこでとても興味を持って頂いたのはとても素晴らしい出会いでした。そのおかげで、短期間の間に、ボリカムサイ県のほかサワンナケート県、ルアンナムター県でも i パス試験のトライアルを実施が実現しました。今回の青年同盟との連携は急な展開で先方も我々も十分な準備ができていたとは言い難いですが、今後の活動でさらに連携深められればと考えています。

(2) 活動の写真



オンライン試験システムの画面



IICT での試験実施風景



ラオス国立大学での試験実施風景



サワンナケート県での試験実施風景



ボリカムサイ県での試験実施風景



ルアンナムター県での試験実施風景



ビエンチャン首都の青年同盟 IT センターにて



IICT での打合せ

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

私たちの団体はもとを辿るとラオスでの国際協力を模索するところが出発点のひとつでしたが、これまで国内での活動に注力してきたため、今回初めて JICA 基金活用事業によって海外での本格的な活動が実施できました。

JICA 殿のサポートを受けている活動ということで、ラオス側もまた日本でご助力いただいた IPA 殿からも積極的な対応が得られ、そうした環境で私たちの今後の活動に向けた足がかりができたことは大変有意義なことであったと思います。ありがとうございました。